

目的 前回の実験で、進出色と後退色の見えにはコントラストが要因していることが明らかになった。しかしながら、視覚特性は照明環境に応じて変化しているため、事故対策としての安全服に応用しようとする際には、夕暮れ時に生じるプルキンエ移行によって、進出・後退の見えにどのような影響があるのかを調べる必要がある。そこで、前回明所視状態で行なった実験と同様の実験を薄明視状態で行ない、前回の実験と比較検討する。

方法 前回使用したサンプル（マンセル値で表示された色紙を用い、B5判の背景刺激の上に視角 5° の検査刺激を2枚 6° の間隔をあけて並置するように構成し、明度コントラスト及び彩度コントラストの大きさが種々異なるように作製したサンプル）を用いて、被験者に観察させ、進出して見える検査刺激を答えてもらった。実験装置には照明光源を使用し、薄明視の状態として $5lx$ の照度レベルに設定し、実験を行なった。

結果 $5lx$ 照明下においても、明度コントラスト、彩度コントラスト共にコントラストが高いほど刺激は進出し、コントラストが低いほど刺激は後退して見えることが分かった。コントラストが2つの検査刺激とも同程度の場合は、無彩色においては明度の高い方が、有彩色においては彩度の高い方の検査刺激が進出して見えた。これは、膨張・収縮、誘目性などの他の要因が働いているためだと考えられる。今回の実験では、進出・後退の見えにコントラストの要因が働いている時、照度レベルの変化によって違いは見られなかった。